

機関番号：32613

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520129

研究課題名(和文) 近現代ロシアにおける音楽とナショナリズム—オペラ、大衆歌曲、国歌にみる諸相

研究課題名(英文) Music and Nationalism in the Modern Russia: the Various Aspects in Operas, Popular Songs and the National Anthems

研究代表者

梅津 紀雄 (UMETSU NORIO)

工学院大学・工学部・講師

研究者番号：20323462

研究成果の概要(和文)：

近現代ロシアの音楽におけるナショナリズムの諸相を、社会史や文化政策史との相関関係を分析しつつ、創作・批評・受容・宣伝の観点から考察した。研究対象は、オペラ、大衆歌曲、国歌を中心とした。特に、体制の変化の影響を強く受けた、グリーンカ《皇帝に捧げた命》(《イヴァーン・スサーニン》) やボロディン《イーゴリ公》などのオペラ作品の改訂、演出、そして国歌の変遷に重点を置いた。

研究成果の概要(英文)：

The purpose of this project is to examine the various aspects of the nationalism in music of modern Russia from the perspective of the interrelationship between social history, cultural politics and music. The analysis is focused on the creation, criticism, reception and propaganda of operas, popular songs and the national anthems, with particular focus on Glinka's "Life for the Tsar" ("Ivan Susanin"), Borodin's "Prince Igor" and the history of the Soviet/Russia national anthems.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：表象文化論

科研費の分科・細目：芸術学芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：ロシア、音楽、オペラ、国歌、大衆歌曲、ナショナリズム、国民主義、ソ連

1. 研究開始当初の背景

(2) 研究代表者は、かつて国際交流基金(2005〔平成17〕年度)知的交流フェローシップ(派遣)を得て、研究課題「ソヴィエト・ロシアにおける戦争と芸術—メディアとしての音楽」を、さらにトヨタ財団(2006〔平成18〕年度)の研究助成を得て、研究課題「生きる糧としての音楽—大祖国戦争(独ソ戦)期のロシアにおける経験に即して」を遂行し、またマース『ロシア音楽史』(春秋社)の翻訳と年表編集を行って、広くロシアの音楽とナショナリズムの問題に関心を抱くにいたった。

(1) 他方、従来「ロシア国民楽派」に代表

されるように、ロシア音楽にナショナリズム(国民主義)的傾向が存在したことは共通了解になっていた。だが、「国民楽派」という言葉には固定観念がこびりついていて実態と離反している側面があり、加えて、社会史・文化政策史との関係やその前後の時期との相関関係の検討は十分に行われていなかった。また、近年ロシア音楽研究には大きな発展が見られ、多くの記述が書き換えられつつあったが、それらの新しい視点は音楽史一般やロシア史一般にはあまり浸透していなかった。他方で、音楽とナショナリズムというテーマも、近年活発になりつつあったが、本格的な研究は一部の研究者が手がけるに

留まっていた。また、プーチン政権のもとでの愛国主義的傾向が帝政時代やソ連時代との一定の連続性をみせていることは多くの人々に意識されているものと考えられるが、それはいまだ学術的な分析対象となっていなかった。

こうした状況を打開し、ロシア・ナショナリズムの現代性を明らかにするためにも、音楽とナショナリズムとの相関関係を帝政時代にさかのぼって検討することが有効であると考えた次第である。

2. 研究の目的

本研究では、以上の背景を踏まえ、近現代ロシアの音楽（特にオペラや大衆歌曲、国歌）におけるナショナリズムの諸相を、社会史や文化政策史との相関関係を分析しつつ、創作・批評・受容・宣伝の観点から明らかにすることを目的とした。

(1) 19世紀前半の状況

ニコライ一世時代の作曲家グリーンカのオペラ《皇帝に捧げた命》(1836年初演)の創作と受容を、文化政策との相関関係の観点から研究した。また、同じ時期(1833年)に成立した帝政ロシア国歌についても合わせて検討した。

(2) 「国民楽派」の成立過程(19世紀後半の状況)

ソ連時代における受容の観点から、芸術批評家スターソフの言説に着目して、「国民楽派」が言説によって構築されるプロセスを検討した。それと同時に、ロシア初的高等音楽教育機関である音楽院の成立を、芸術音楽界の「ロシア化」として検討した。

(3) ソ連時代の文化政策と音楽

分析対象が膨大のため、対象をしばって観察することにより、帝政時代との連続性と断絶を浮き彫りにするよう試みた。特に19世紀の作品の批評・宣伝に着目してその変遷分析し、ソ連国歌の変遷(旋律は2種類、歌詞は3種類)も検討した。

(4) 現代ロシアのナショナリズムと音楽

現代ロシアの愛国主義的傾向は、2001年に制定された国歌にも端的にみられるが、この国歌の旋律がソ連時代(独ソ戦時)に制定された国歌と同じ旋律であることから明らかであるように、ソ連時代との連続性が見逃せないところである。ここでは、国歌の他に、上記の(1)～(3)で検討の対象とした《皇帝に捧げた命》などの作品の受容なども視野に入れて検討した。

3. 研究の方法

一 本研究は、近現代ロシアにおける音楽とナショナリズムとの関係を、帝政およびソ連、および現代ロシアの文化政策を解明しつつ、オペラや大衆歌曲、および国歌の創作・受

容・批評・宣伝の諸相を分析する形で進められた。その際、音楽がナショナリズムの宣伝の媒体(メディア)であると同時に、宣伝の対象である側面にも着目した

資料収集は、ロシア国立図書館(Russian State Library)や歴史図書館(Russian State Public Library of History)やロシア国立文学芸術文書館(Russian State Archive of Literature and Arts)などのアーカイブを利用しつつ行われた。

(1) 19世紀前半の状況

ニコライ一世時代の文化政策、作曲家グリーンカのオペラ《皇帝に捧げた命》の創作と受容、および帝政ロシア国歌にかんする資料を中心に収集し、分析した。

(2) 「国民楽派」の成立過程(19世紀後半の状況)

「国民楽派」の成立過程を、特芸術批評家スターソフの著作集を収集して分析、また音楽院成立のプロセスに関して、アントン・ルビンシテインら関係者の言説を収集し、分析を試みた。

(3) ソ連時代の文化政策と音楽

主として19世紀作品の受容と宣伝、および国歌の変遷に照準を当てて、政策との相関関係を分析した。とりわけ、グリーンカのオペラ《皇帝に捧げた命》などのように、19世紀を代表するナショナリスティックな作品の受容に着目した。また、国歌の変遷の背景を検討した。

(4) 現代ロシアのナショナリズムと音楽

国歌をめぐる議論や、19世紀作品の演出・批評に着目して分析した。とりわけ、エリツイン政権時代(1991～2000)とプーチン政権時代(2000～現在)との相違、1995年および2005年の戦勝50周年・60周年記念の際の愛国主義の高揚に着目した。オペラについては、ボロディンの《イーゴリ公》のように、エリツイン時代にボリショイ劇場など2つの著名な劇場で独特のバージョンが現れて消えた背景にも着目して、分析を行った。

4. 研究成果

(1) グリーンカのオペラ《皇帝に捧げた命》の《イヴァーン・スサーニン》への改作問題に関しては、ロシア国立文学・芸術文書館において、1930年代における復活の途上のプロセスに関し、クルシェニンニコフやゴロデーツキイらの文書を閲覧、知見を深めることができた。クルシェニンニコフは1920年代より《皇帝に捧げた命》の台本改訂に取り組んだ先駆者だが、1930年代末の上演に当たっては関わることを認められなかったことをはっきり確認できた。

(2) 国歌の歴史の概要については、平成20年9月13日に埼玉大学東京サテライトで開催された第1回「ロシア的主体」プロジェクト

ト研究会にて「ロシア国歌史～歴史の変遷とその表象するもの」と題して報告したが、この時点での検討は大まかなもので不十分であった。その後、ロシア国立文学・芸術文書館などにおいて、国歌創作プロジェクトに関する文書を閲覧し、知見を深めることができた。特に、ほとんど文献のない戦争直後のロシア社会主義共和国連邦における国歌創作プロジェクト（未完）については貴重な内容と考えるものである。

(3)「国民楽派」のオペラの代表作であるボロディーンの《イーゴリ公》については、オリエンタリズムとの関係を視野に入れつつ、現代の諸般も含めて検討を行い、その成果の一部を〔雑誌論文〕⑭で公表した。この論文では、モスクワ・ポリショイ劇場が1990年代に上演したレヴァショーフ版やサンクト・ペテルブルグのマリインスキー劇場が同時期に上演したファーリク版、そして映画版を含めた諸版についての詳細な検討を行っているが、これは諸外国でも例を見ないものである。

(4)19世紀ロシア音楽におけるナショナリズムの問題に関しては、オリエンタリズムの視点から、その研究成果の一部を、〔学会発表〕②で報告し、さらに考察を深める機会を得た。特に、音楽的ナショナリズムの問題は、オリエンタリズム、広くはエグゾティシズムとの関係を視野に入れて論じる必要性を実感した。この点に関しては、今後の課題としていきたい。

(5)関連テーマとして、一般に民族性の表象と見なされるポロネーズがチャイコフスキーにおいてロシア帝政の象徴となる、という視点を〔雑誌論文〕③で指摘しておいた。

(6)総括として、いまだ十分に読み込んで分析できていない文献が残っており、通時的に把握できるような形で研究成果を発表できていないことは反省すべき点である。特に大衆歌曲に関する部分が遅れている。今後速やかな成果発表に努めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計15件)

- ①梅津紀雄、ショスタコーヴィチとロシア革命：作曲家の生涯と創作をめぐる神話と現実、査読無、青山学院女子短期大学総合文化研究所年報、18号、2011年、97-113頁
- ②梅津紀雄、マリインスキー劇場(マリインスキー・オペラ)、査読無、モーストリー・クラシック、166号、2011年、46-47頁
- ③梅津紀雄、ロシア／チャイコフスキーのポロネーズ、Symphony、査読無、2010-6号、2010年、10-11頁

④梅津紀雄、ポリショイ劇場での《こうもり》初演、フィルハーモニー、査読無、82-5号、2010年、68-69頁

⑤梅津紀雄、サンクトペテルブルクの2つの音楽祭から、フィルハーモニー、査読無、82-4号、2010年、53頁

⑥梅津紀雄、第3回ソチ冬季国際音楽祭、フィルハーモニー、査読無、82-3号、2010年、86頁

⑦梅津紀雄、モスクワ・ポリショイ劇場での《ウオツェック》初演、フィルハーモニー、査読無、82-2号、2010年、64-65頁

⑧梅津紀雄、マリインスキー劇場でのリヒャルト・シュトラウス《影のない女》初演、フィルハーモニー、査読無、82-1号、2010年、56頁

⑨梅津紀雄、シュニトケの魅力～多様式主義とアニメーションを中心に、月刊Orchestra、査読無、11月号、2009年、24-26頁

⑩梅津紀雄、音楽のジダーノフ批判はいかに起こったか、東京国際大学論叢経済学部編、査読無、41号、2009年、65-82頁

⑪梅津紀雄、ショスタコーヴィチ・交響曲第15番を讀解する、工学院大学共通課程研究論叢、査読無、47-1号、2009年、29-43頁

⑫梅津紀雄、サンクト・ペテルブルグ・フィルとマリインスキー劇場の新シーズン、フィルハーモニー、査読無、81-9号、2009年、60頁

⑬梅津紀雄、モスクワ・ポリショイ劇場の新体制、フィルハーモニー、査読無、81-8号、2009年、64頁

⑭梅津紀雄、オペラ《イーゴリ公》諸版にみるその現代性：歴史表象とオリエンタリズム、東京国際大学論叢経済学部編、査読無、40号、2009年、81-98頁

⑮梅津紀雄、音楽の前衛とロシア・アヴァンギャルド、工学院大学共通課程研究論叢、査読無、46-1号、2008年、17-33頁

〔学会発表〕(計2件)

①UMETSU Norio、Oriental Elements in Russian Music and the Reception in Western Europe: Nationalism, Orientalism and Russianness, Orient on Orient: Images of Asia in Eurasian Countries、2010年7月8日、北海道大学スラブ研究センター

②梅津紀雄、革命とショスタコーヴィチ、研究会プロジェクト「革命・改革・改良の比較研究—フランスとロシアの革命から知と情報の革命まで—」、2009年7月9日、青山学院女子短期大学

〔図書〕(計4件)

①チャイコフスキー『組曲「くるみ割り人形」ピアノ・ソロ版&連弾版』プリズム、2010年、担当3-7頁(梅津紀雄「解説」)

- ②『ロシアの夢 1917-1937』アートインプレッション、2009年、担当 146-147頁(梅津紀雄「ロシア・アヴァンギャルドの音楽」)
- ③新国立劇場運営財団営業部編『ドミトリー・ショスタコーヴィチ ムツェンスク郡のマクベス夫人』財団法人新国立劇場運営財団、2009年、担当 36-39頁(梅津紀雄「ロシア・オペラの系譜」)
- ④吉松隆編『究極のCD200 クラシックの自由時間《改訂新版》』学研パブリッシング、2009年、担当 29頁(梅津紀雄「ラフマニノフ ピアノ協奏曲第2番ハ短調 op.18」)、31頁(梅津紀雄「リムスキー＝コルサコフ 交響組曲《シェエラザード》op.35」)、151頁(梅津紀雄「チャイコフスキー、ムソルグスキー、ラフマニノフ ロシア歌曲集」)、219頁(梅津紀雄「ロシア近代名曲ベスト3」)

6. 研究組織

(1)研究代表者

梅津紀雄 (UMETSU NORIO)

研究者番号：20323462